2024年11月12日 中日新聞 朝刊 朝刊地域経済 9頁

カキ殻で畳 つややか

名古屋の業者考案

樹脂と混ぜ、肌触り追求

伊藤畳商店(名古屋市)が廃棄されるカキの殻を活用した畳の開発を進めている。イグサの畳よりも耐久性に優れ、汚れにくいのが特徴で、来年発売する。取締役の伊藤貴大さん(32)は「つやがあって見た目に高級感もある。環境意識が高い層をターゲットにしていきたい」と意気込んでいる。(岸友里)

畳表に粉末状に砕いたカキ殻を20~30%練り込んだ樹脂シートを使用。イグサを編んだ模様を加工したり着色したりと多彩なデザインを用意し、部屋の雰囲気に合わせて選べるようにする。年間1万畳の販売を目指す。

カキ殻に含まれる炭酸カルシウムとキチン質が日焼けやこすれに強い性質を生み、イグサの「弱点」の改善につながったという。畳表は張り替え後に回収し、リサイクルする予定。特許取得の準備も進めている。

同社はことしで創業70年。伊藤さんは本業の傍ら、2年前から島根県の隠岐諸島でカキの養殖事業にも取り組んでおり、大量に廃棄されるカキ殻を見て「何とかできないか」と考えていたという。

樹脂シートに混ぜるカキ殻粉末の配合割合などについて試行錯誤し、肌触りの良さや機能性を考慮して最適な比率を突き止めた。

近年は国内のイグサ農家の廃業が進んでおり、農林水産省の統計によると2023年の生産量は5440トンと10年前から半減。中国からの輸入は増えているものの、国産イグサは今後も値上がりが予想されている。伊藤さんは「イグサ以外の材料を使った畳に挑戦して、畳業界を元気づけたい」と話している。

カキ殻粉末を活用した畳を紹介する伊藤貴大さん。耐久性などに優れ、緑や白などさまざまな色が選べる＝名古屋市の伊藤畳商店で

（c）.中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています